ジョン・ミルトン作「父上に捧げる」

—対照訳の試み—

稲 用 茂 夫

John Milton's "Ad Patrem"

—A Tentative Parallel Translation into Japanese—

INAMOCHI, Shigeo

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第37巻第1号

2015年4月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 37, No. 1, April 2015

OITA, JAPAN

ジョン・ミルトン作「父上に捧げる」

—対照訳の試み—

稲 用 茂 夫*

【要 旨】 ラテン語で書かれたジョン・ミルトンの詩"Ad Patrem"について、ラテン語原文と日本語訳文を試みとして対照訳で示す。時間的にも空間的にも遠い詩作品の理解のためには、ラテン語と日本語のへだたりによる困難はあろうとも、基礎的作業は不可避である。"Ad Patrem"は、ミルトンの「初期詩集」(1645)のラテン語詩部門のうちで特に注目すべき興味深い要素をもつ作品であり、この詩人の英語による作品を鑑賞するにおいても、青年時代の息子にとっての父親という家族関係や詩人として世に出ようとする心情を知るためにも重要な内容を含んでいる。

【キーワード】 ジョン・ミルトン 「父上に捧げる」 ラテン語 初期詩集 John Milton "Ad Patrem" Poems(1645) 翻訳

はじめに

ジョン・ミルトン(1608-1674)の詩作について、英文学史でとりあげられる作品は英語によって執筆されたものが中心となる。しかしながら、当時の詩人また文学者たちのみならず、ようやくこの頃から本格的になった自然科学分野の研究者もふくめて、いやしくも学問学芸にかかわる者たちは、とくにヨーロッパ大陸を意識するために、共通する言語としてのラテン語で執筆し、公刊することはごく普通のことであった。むしろ、いかなる題材を取りあつかうにせよ作家が対外的にもものを書くときには、その頭の中にはラテン語がしっかりと存在していて、先にラテン語で発想する内容を、次に英語に置き換えて書き留めるかたちをとった、という理解の仕方のほうが適切であろう。そのため特に初期近代英語においては、英語がねじまげられた印象のある難解な Latinism (ラテン語法) がしばしば指摘される場合が多くある。

ここに翻訳するのは、青年期のミルトンの英語による作品について検討するにあたって、内容や執筆の背景などの側面から看過することのできないラテン語による詩作の1篇である。題名の"Ad Patrem"からもわかるように、直接的には自分の父親(同姓同名の John Milton, 1562?-1647)に宛てて書かれたものである。英語のみならず、ラテン語やイタリア語などによって書かれた多数のミルトンの作品のうちから本篇に注目するのは、その当時の事情の注釈と

平成26年10月31日受理

*いなもち・しげお 大分大学教育福祉科学部言語教育講座(英文学)

もなる内容をもつためであり、自伝の要素もあり、かつ若かりし頃のミルトンの詩作においてのいくつかの重要な節目における、詩人自身の考えの表明ともなることに関係しているためである。さらには、晩年の大作 *Paradise Lost* にも出現する主題の萌芽もすでに見られるのである。

以下に本編の概略を示すが、ここではラテン語原文との対照訳が語学的にうまく成立しているかどうかを提示することが重要であり、執筆の年代や成立の背景的情報などのくわしいことがらについては別の機会において検討したいと考えている。

ミルトンの「初期詩集」(*Poems of Mr. John Milton, Both English and Latin, compos'd at several times*. London, 1645) は、英語詩部門とラテン語詩部門の2部からなっている。厳密なりプリント版で確認できるが、前半部が英語による詩で 65 ページ分、後半部がラテン語による詩で 87 ページ分、中央の区切りのように 54 ページ分の「ラドロウ城で上演の仮面劇」(いわゆる"Comus"の台本)が挿入された編集の形式で印刷されている。

"Ad Patrem"の構造は、原詩の印刷形式にある *verse paragraph* の区分けに従えば、全体として7部から成り、次の通りの区切りが認められる：

1-16 行；17-55 行；56-66 行；67-92 行；93-110 行；111-114 行；115-120 行

"Ad Patrem"の主題は、題名そのものにあるように家族関係、特に親と子の関係、さらにはミルトンにとっては、父親と息子である自分の人間関係が中心となる。詩人としての召命意識と父親の職業(当時としてもかなり裕福な職種の *scrivener* (公証人、代書事務職のかたわら金貸業)であった)について、また親から子へ受け継ぐもの、文学者・詩人となることについて、その父親の姿をとおして考えていることが読み取れる。

晩年の大作である *Paradise Lost* に似て、冒頭(1-5)にはいくらか大げさな *invocation* が置かれているが、「その大いなる翼に乗って」(*audacibus alias*)などは、あとになって叙事詩第1巻冒頭のときの翼のイメージと似た表現「... 空高く飛び翔けようとする... 私の大胆な歌」(*Invoke thy aid to my adventurous Song, / That with no middle flight intends to soar / Above th' Aonian Mount, while it pursues / Things unattempted yet in Prose or Rhime.* (13-16)) で再び出現する。

次にある「けれども、この紙面にはぼくの持つ財産(才能)すべてが示されているので、ぼくのすべての財産目録をこの紙面でご覧願いたい」(*Sed tamen hæc nostros ostendit pagina census, / Et quod habemus opum chartâ numeravimus istâ* (12-13)) が、公証人/金貸業である父親に直結するのは詩を一つの申告書類として示しているためである。これも父親の職業に関連する表現を利用して、多少おふざけ的な言い方をわざとしているのであろう。とかくミルトンについては大まじめに解釈しそうになるが、それでは言葉に巧みな、この詩人の意図からは離れることになる。ただし、その父親がなりわいとする公的な書き物仕事は、想像力を駆使して、詩人的創造的に書く仕事、執筆活動ではないという点が異なるわけである。

続けて、「どうか神聖なる詩女神たち(からの詩)を軽蔑することのないように」(*Nec tu perge precor sacras contemnere Musas*, 56)と願いつつ、「分かたれた神様」(*Dividuumque Deum*, 66)としての才能をわれわれ二人は、父親と息子で分かち合っているのだから、それぞれにふさわしい仕事をするのであり、息子のほうは、父親とは別の種類の物書きになるつもりであると述べる。

本編は、青年ミルトンが父親に対して自分はいかなる人間なのかを宣言する、すなわち自分が詩人となる役目の「配慮（おもい）の正しきことを（父上へ）証する」（I may assert Eternal Providence, / And justify my ways to my father, *Paradise Lost*, Bk I.25-26 を改変，加筆。）作品と見ることもできよう。

詩人の仕事について、軽蔑することのないように願う表現はたびたび現れ、これについてはかなり真剣に、なんとしてでも認めてもらいたいとの真摯な態度で訴える。

特に71-76行には父親に対する思いが強く現れ、自分の受けた教育と父と子の絆を感謝しつつ回想する。職業にはしなかったが、趣味で作曲までするほど音楽を愛する父親が詩歌を見下すはずはないだろう。息子の目指す詩人に異議を唱えることもなく、金銭づくめの、利益追求的な法律関係の職種に就かせようとしなかった。子としての感謝の気持ちと詩人として生きる道を選択する固い決意を主張する。

このあとの、父親の経済的援助によって可能であった、すべての言語、文化、文学などの学問探求が一覧表、目録 (catalogue) で語られ、学問の集大成となる大陸旅行に関するたくさんの地名が同様に示される。旅行予定先の地名や国名を父親に示して、実際に訪問しなくとも、全世界を把握しようとしている詩人の考え方を語ることで、あつかましくすべての費用の負担を要請する。(実際に出かけた時には従者1名を伴っていた。また、この旅行日程は現在時制で書かれていることにより、過去の報告ではなく、これからの計画として作られていると解釈でき、執筆は大陸旅行(1638年)の直前であると推測される。)

詩人としての目標は、「勝者の証のツタとローレルの冠」(laurosque sedebo, 102)を頭にいただいて、高いところ (sublimis, 110)を歩くこと、と述べている。

最終部分(115-120)にも、独立宣言的な、子ども時代との決別、あるいは成人として自立することの自覚、もはや幼い時代の詩作からは別れて転換する気持ち (juvenilia carmina, 115)を語る。

そして最後に、暗闇と光の対立の構図を示して、父親に対して文学者を目指す息子の希望を述べて、この詩を締めくくる。

この部分は複雑な要素が含まれた表現で、父と子の関係を述べるが、かなり現実のミルトン自身の個人的感情が込められていて、父親に対する反抗または不服従の表明とも読めるかもしれないのである。"parentis / Nomen" (119-120)「父親の名前」とは、どの「父」のことなのか。本編では父親の名前は書いていない。とくにミルトンにおいては同姓同名でもある。さらには、「天の父」も考えられる。ここでの父親は何を指すのであろうか。父親と息子であるから、従属かつ服従の関係は常に存在するけれども、反抗、不服従あるいは「そむく」という感情はありえないのか。反対の立場から考えるとすれば、それでは息子であるというのはどういう意味があるのか、について詩人は追求していたかもしれない。

なお、今回の翻訳を示すにあたっては、ギリシャ・ローマ古典についての予備知識が補足されているほうが、和訳文のみで読むとしても理解しやすくなるための工夫として、丸かっこ () による注を多用した。追加的説明が煩雑かもしれないが、西洋古典全般の知識が共有されているわけではない現代日本人にとっては必要不可欠であろうと考えたためである。

もう一つは、視覚的なこととして、字下げ (インデント) のみで示され、かつ印刷されてきた区切り (最初と最後を除いた5ヶ所) を原詩でも和訳でも1行あけにして明確に示してある。

(原詩)

Ad Patrem.

Nunc mea Pierios cupiam per pectora fontes
 Irriguas torquere vias, totumque per ora
 Volvere laxatum gemino de vertice rivum;
 Ut tenues oblita sonos audacibus alis

[5] Surgat in officium venerandi Musa parentis.

Hoc utcunque tibi gratum pater optime carmen
 Exiguum meditatur opus, nec novimus ipsi
 Aptiùs à nobis quæ possint munera donis
 Respondere tuis, quamvis nec maxima possint

[10] Respondere tuis, nedum ut par gratia donis

Ess queat, vacuis quæ redditur arida verbis.
 Sed tamen hæc nostros ostendit pagina census,
 Et quod habemus opum chartâ numeravimus istâ
 Quæ mihi sunt nullæ, nisi quas dedit aurea Clio

[15] Quas mihi semoto somni peperere sub antro,

Et nemoris laureta sacri Parnassides umbræ.

Nec tu vatis opus divinum despice carmen,
 Quo nihil æthereos ortus, & semina cæli,
 Nil magis humanam commendat origine mentem,

[20] Sancta Promethéæ retinens vestigia flammæ.

Carmen amant superi, tremebundaque Tartara carmen
 Ima ciere valet, divosque ligare profundos,
 Et triplici duros Manes adamante coerces.
 Carmine sepositi retegunt arcana futuri

[25] Phœbades, & tremulæ pallentes ora Sibyllæ;

Carmina sacrificus sollennes pangit ad aras
 Aurea seu sternit motantem cornua taurum;
 Seu cùm fata sagax fumantibus abdita fibris
 Consultit, & tepidis Parcam scrutatur in extis.

[30] Nos etiam patrium tunc cum repetemus Olympum,

Æternæque moræ stabunt immobilis ævi,
 Ibimus auratis per cæli templa coronis,
 Dulcia suaviloquo sociantes carmina plectro,
 Astra quibus, geminique poli convexa sonabunt.

[35] Spiritus & rapidos qui circinat igneus orbis.

父上に捧げる

今こそ、ぼくが願うのは、(詩女神たちの泉) ピエリアに湧き出る流れがぼくの心に向かい、
 (パルナソス山の) 二つの峰からしたり落ちる流れ(靈感)が
 ぼくの唇からあふれ出てきますように。(1-3)
 そしてぼくの駄作の詩は忘れて、わが詩女神が大いなる翼にのって舞い上がり、
 どうか父上に榮譽を捧げる仕事を立派になしとげられますように。(4-5)
 最高の父上よ、この詩があなたにいかほどに喜ばれる作品となり得るか、
 それとも貧弱な努力に終わってしまうのかはぼくにはわからない。
 父上からいただいたぼくの最大の贈り物の才能で、正しく報いることができるのだろうか。
 空虚な言葉を連ねるのなら、とうてい感謝の気持ちは比べられもしない。(6-11)
 けれども、この紙面にはぼくの持つ財産すべてが示されているので、ぼくの
 すべての財産目録をこの紙面でご覧願いたい。それは黄金の(詩女神)クレイオー様から
 ぼくに与えられたもの、
 遠くはるかな洞窟の中の夢から生まれ、パルナソス山の木蔭で、神聖な森にある
 ローレル(月桂樹)の茂みに生まれるものにほかならないのですから。 <1-16行>

どうか神聖なる詩歌を作る、詩人のわざを軽蔑しないでください。
 詩歌こそは、(神)プロメテウスからの火の神聖な痕跡を保ちつづけ、
 天からのわれらの誕生、天から下った種というわれら人間の心から発するもので、
 これに勝るものは何一つないのですから。(17-20)
 詩歌をこそ神々は愛され、詩歌は、あの恐ろしい(地獄)タルタロスの底無しの淵を
 揺らす力を持ち、三重の(きわめて堅牢堅固な金属)アダマントでできた鎖で
 荒々しい者どもを地下の世界に縛りつけたのだ。(21-23)
 詩歌によって、ポイボスの神(アポロン)に仕える巫女たちも、顔面蒼白で
 身を震わせるシビュラの女たちも、遠い未来の秘密を予言した。(24-25)
 おごそかなる祭壇で燔祭を神様に捧げる祭司が作るのは詩歌である。
 金色の角を震わせる雄牛を倒して(生け贄にする)ときも、煙を上げる
 内臓の中に秘められた運命を見極めるときも。(26-29)
 それから、われらが故郷のオリュンポスの天国にもどり、
 永遠の時代がじっと静止するときには、
 われらは黄金の冠を頭にのせて天国の神殿を歩み、
 豎琴の奏でる美しい調べに甘美な歌を合わせると、
 その歌に天の星たちも天の両極も音を鳴り響かせることだろう。(30-34)
 今でも、すばやく回転する天球を、焰となった(詩人としてのぼくの)魂自身が、
 飛翔して、星たちの聖歌隊に調和して歌うのは

Nunc quoque sydereis intercinit ipse choreis
 Immortale melos, & inenarrabile carmen;
 Torrida dum rutilus compescit sibila serpens,
 Demissoque ferox gladio mansuescit Orion;

[40] Stellarum nec sentit onus Maurusius Atlas.

Carmina regales epulas ornare solebant,
 Cum nondum luxus, vastæque immensa vorago
 Nota gulæ, & modico spumabat coena Lyæo.
 Tum de more sedens festa ad convivia vates

[45] Æsculeâ intonsos redimitus ab arbore crines,
 Heroumque actus, imitandaque gesta canebat,
 Et chaos, & positi latè fundamina mundi,
 Reptantesque Deos, & alentes numina glandes,
 Et nondum Ætnæo quæsitum fulmen ab antro.

[50] Denique quid vocis modulamen inane juvabit,
 Verborum sensusque vacans, numerique loquacis?
 Silvestres decet iste chorus, non Orphea cantus,
 Qui tenuit fluvios & quercubus addidit aures
 Carmine, non citharâ simulachraque functa canendo

[55] Compulit in lacrymas: habet has à carmine laudes.

Nec tu perge precor sacras contemnere Musas,
 Nec vanas inopesque puta, quarum ipse peritus
 Munere, mille sonos numeros componis ad aptos,
 Millibus & vocem modulis variare canoram

[60] Doctus, Arionii meritò sis nominis hæres.

Nunc tibi quid mirum, si me genuisse poëtam
 Contigerit, charo si tam propè sanguine juncti
 Cognatas artes, studiumque affine sequamur:
 Ipse volens Phœbus se dispertire duobus,

[65] Altera dona mihi, dedit altera dona parenti,
 Dividuumque Deum genitorque puerque tenemus.

Tu tamen ut simules teneras odisse camœnas,
 Non odisse reor, neque enim, pater, ire jubebas
 Quà via lata patet, quà prœnior area lucri,

[70] Certa que condendi fulget spes aurea nummi:
 Nec rapis ad leges, malè custodita que gentis
 Jura, nec insulsis damnas clamoribus aures.

不死不滅の旋律とことばにも絶する詩歌。

しかるに、輝く蛇（の星座）はシュウシュウと鳴る火の息をひそめ、

荒れるオリオン（の星座）は心をやわらげ、その剣を下に降ろす。(35-39)

（北アフリカ）マウレタニアのアトラス神は、星たちの（天を支える）重荷を感じない。(40)

詩歌は、暴飲暴食や底無しの食欲がまだ知られず、ごちそうも

節度あるルアイオスの神（バックス）からの飲み物（ブドウ酒）とともに供されていた

その昔、王様たちの酒宴を飾るものとされていた。(41-43)

そのころは、詩人は習わしとして楽しき宴会に加えられて座し、

そのハサミの入っていない長髪を櫛の葉の冠で飾り、歌って聞かせたのは

英雄たちのかずかずの偉業、模倣に価する功績、さらに

混沌界や世界を支える広大なるいしずえについて、

また、大地を這って進む神々や櫛の木の実を食した神々のことについて、

いかづちがまだエトナ山の火口から出てくることが未知であったことなど。(44-49)

それにしても、いかなる楽しみが空虚な声の旋律の中にあるのだろうか、

意味も言葉も語りの旋律もないままに。(50-51)

森の中で聞こえる合唱にはふさわしくとも、（音楽家で詩人の）オルペーウスのための詩には

ふさわしくなく、

櫛の木に耳を与えたり、川の流れをその歌で止めることができたのは、

オルペーウスのキターラの琴（の演奏）ではなく、かれが歌うことによって

死んだ者たちの亡霊を感動させ、涙を流させたのだ。その名声は歌によって得たもの。

<17-55行>

どうか神聖なる詩女神たち（からの詩）を軽蔑することのないように願います。

どうか空しく価値のないものと思わないでください。このわざに父上は熟達しておられ、幾千もの音符をふさわしい旋律に調和させ、調和のとれた声をたくさんの旋律に合わせて作ってこられた。

父上が正しく（音楽家で詩人の）アリオンの後継者となりますように願うばかり。(56-60)

今さら何の不思議がありましょう、父上が詩人となるぼくの親となる運命であったとして、

血縁で親しく結びついている私たち親子が、

姉妹の間柄の（音楽と詩歌の）芸術と趣味を追い求めたとしても。(61-63)

ポイボスの神（アポロン）が、ご自身を私たち二人と分かつことを欲したまい、

その才能のいづらかをぼくに、またいづらかを父上に与えてくださったから、

私たちはこの分かたれた神様からの賜物を、父と子として守るのです。

<56-66行>

父上は、さりながら、詩女神たちを嫌うふりをなさるけれども、ぼくが

そうではないと信じているのは、父上よ、道が大きく、たやすく金儲けのしやすい所、

金銭を集める黄金の希望が光り輝く所に進めとは、お命じなさらなかった。(67-70)

父上は、国家の法が不正に扱われる、法曹界に向かって急がせたりも、

法令のなまくらな口論でぼくの耳を苦しませたりもなさらなかった。(71-72)

- Sed magis excultam cupiens ditescere mentem,
 Me procul urbano strepitu, secessibus altis
- [75] Abductum Aoniæ jucunda per otia ripæ
 Phœbæo lateri comitem sinis ire beatum.
 Officium chari taceo commune parentis,
 Me poscunt majora, tuo pater optime sumptu
 Cùm mihi Romuleæ patuit facundia linguæ,
- [80] Et Latii veneres, & quæ Jovis ora decebant
 Grandia maniloquis elata vocabula Graiis,
 Addere suasisti quos jactat Gallia flores,
 Et quam degeneri novus Italus ore loquelam
 Fundit, Barbaricos testatus voce tumultus,
- [85] Quæque Palæstinus loquitur mysteria vate.
 Denique quicquid habet cælum, subjectaque cœlo
 Terra parens, terræque & cœlo interfluis aer,
 Quicquid & unda tegit, pontique agitabile marmor,
 Per te nosse licet, per te, si nosse libebit.
- [90] Dimotâque venit spectanda scientia nube,
 Nudaque conspicuos inclinât ad oscula vultus,
 Ni fugisse velim, ni sit libâsse molestum.

- I nunc, confer opes quisquis malesanus avitas
 Austriaci gazas, Perüanaque regna præoptas.
- [95] Quæ potuit majora pater tribuisse, vel ipse
 Jupiter, excepto, donâsset ut omnia, cœlo?
 Non potiora dedit, quamvis & tuta fuissent,
 Publica qui juveni commisit lumina nato
 Atque Hyperionios currus, & fræna diei,
- [100] Et circùm undantem radiatâ luce tiaram.
 Ergo ego jam doctæ pars quamlibet ima catervæ
 Victrices hederas inter, laurosque sedebo,
 Jamque nec obscurus populos miscebor inertî,
 Vitabuntque oculos vestigia nostra profanos.
- [105] Este procul vigiles curæ, procul este querelæ,
 Invidiæque acies transverso tortilis hirquo,
 Sæva nec anguiferos extende Calumnia rictus;
 In me triste nihil fædissima turba potestis,
 Nec vestri sum juris ego: securaque tutus
- [110] Pectora, vipereo gradiar sublimis ab ictu.

それよりむしろ、ぼくがさらに学問芸術を豊かに養うようにと、
 町中のやかましきから遠く離れ、深い閑居の生活に導いてくださって、
 ポイボスの神（アポロン）のかたわらにいる幸福な友として、（詩女神たちの住む山）
 アーオニアの流れの岸辺の楽しき安逸をむさぼることをさせてくださった。（73-76）
 ぼくは、ふつうの父親の息子に対する世話については語りません。
 ぼくにはもっと多くのことが求められているのですから。最高の父上よ、父上からの経費
 すべての丸抱えによって、ぼくがロムルス（ラテン語）の雄弁と
 ラテン語の美しさと、ジョウヴ（ユピテル；ゼウス）の神の口にこそふさわしい、高貴な
 ギリシャ人の力強く、高尚な言語を修めた時、父上はガリアの誇る花（フランス語）と
 新しいイタリア人のいやしい口から流す言葉（イタリア語）—これは野蛮な戦争を
 口調で証明するもの—と、さらにパレスティナの預言者たちが
 秘儀を語る言葉（旧約聖書のヘブライ語）までも学ぶように勧めてくださった。（77-85）
 結局のところ、大空の支えるものすべて、空の下にある母なる大地、
 大地と大空の間を流れている大気、大理石のような泡立つ海の覆い隠すもの、すべては
 父上のおかげでぼくは学ぶことができるし、学ぶつもりになりさえすればよいのは
 父上のおかげなのだ。（86-89）
 雲がさけて、知識（の女神）が現れる。隠すことなく、あらわな姿で、ぼくの口づけを
 受けようと身をかがめ、輝ける顔を差し出してくる。ぼくが
 逃げ出したいと思わないように、ぼくがこの女神（の口づけ）を味わうことを
 わずらわしいと思わないように。

< 67-92行 >

だから、出かけて富を取れ、（東方の）オーストリアやペルー王国のもつ
 古代からの財宝を欲する（つまらぬ）者たちよ。（93-94）
 父親として、これ以上の大なる財宝を与えられようか。（主神）ユピテルご自身でも、
 天上界を除いてのすべてを与えたとしても、できるではありませんか。（95-96）
 あの（アポロンの）神も、幼き息子（パエトーン）に全世界に分かつ光を、
 すなわち（太陽神）ヒュペリーオーンの（天翔る）戦車と昼用の手綱と
 まばゆい光輪の輝く冠を、ゆだねたけれども—たとえこれらが危険なものでは
 なかったとしても—それ以上の偉大な贈り物はお与えにはならなかった。（97-100）
 それゆえに、ぼく自身としては今のところは小さな地位に甘んじているかもしれないが、
 必ずや学識ある人々の中で、（バックス神の象徴の）ツタと（アポロン神の象徴の）ローレルで
 編んだ（勝者の証の）冠をかぶった座を占めるつもりである。（101-102）
 ぼくは、もう、つまらぬ無教養な大衆と交わって無名のままとなることはしないし、
 汚れた者たちのまなざしを避ける道をぼくは進むことにする。（103-104）
 去ってしまえ、眠らない心配よ。不平不満よ、去ってしまえ。
 ヤギのごとき流し目をした、ねじれたまなざしの嫉妬よ、去れ。
 ヘビの詰まった口を開くな、残忍な誹謗中傷よ。（105-107）
 醜悪な群衆よ、ぼくを傷つけることはできはしない。
 おまえたちの支配に、ぼくは服従しない。安全で心安らかにして、
 ヘビの一撃が届かない、はるかな高みをぼくは歩むのだ。

< 93-110行 >

At tibi, chare pater, postquam non æqua merenti
Posse referre datur, nec dona rependere factis,
Sit memorâsse satis, repetitaque munera grato
Percensere animo, sidæque reponere menti.

[115] Et vos, O nostri, juvenilia carmina, lusus,
Si modo perpetuos sperare audebitis annos,
Et domini superesse rogo, lucemque tueri,
Nec spisso rapient oblivia nigra sub Orco,
Forsitan has laudes, decantatumque parentis
[120] Nomen, ad exemplum, sero servabitis ævo.

しかし、愛する父上よ、あなたに対して等しく、ぼくのほうから報いることはできないし、
 また、父上からの贈り物も行為で釣り合うことはないので、ぼくは感謝を持ちつつ、
 父上のたびたびの好意を記憶して、思い出して語り、
 心の中に誠実に貯えておくことで満足させていただきたい。 <111-114行>

そして、おまえたち、ぼくの若かりしときの詩歌よ、楽しみよ、
 もしもおまえたちが、あえて不死の命を望むなら、その主人（作者）の
 葬儀の薪（の炎）よりも長生きして、その光を見るために、
 もしも暗い忘却が、おまえたちを（地下の死者の国の）冥界オルクスに連れ去るのでなければ、
 おそらくは、この賞讃の詩と誉め称えられた父親の名声を、
 おまえたちは保存することになるだろう、のちの時代への模範として。 <115-120行>

注

本論考を通じて、ミルトンからの引用は初版のつづり字と句読法を重視して採録する編集方針による版本 Stella P. Revard (ed.) *John Milton Complete Shorter Poems* (with original spelling and punctuation)(Wiley-Blackwell, 2009)("Ad Patrem", pp. 240-247)を使用した。

注釈としては *A Variorum Commentary on the Poems of John Milton* (New York and London: Columbia Univ. Press & RKP, 1970-継続中); Vol. I (Pp. vii+389) "The Latin and Greek Poems; The Italian Poems," eds. Douglas Bush; J.E. Shaw & A. Bartlett Giamatti, "Ad Patrem," pp. 232-254 (1970)を利用した。

John Milton's "Ad Patrem"
—A Tentative Parallel Translation into Japanese—

INAMOCHI, Shigeo

Abstract

"Ad Patrem", a Latin poem by the young John Milton, is translated into the Japanese language as a parallel form. Although Latin and Japanese are quite different in language structure, this kind of comparative presentation should be indispensable to foreign literary studies. "Ad Patrem" is an important and interesting piece among Milton's early poetical works, particularly from a biographical point of view in examining the father-son relationship.

【Key words】 John Milton, "Ad Patrem", Poems(1645), Latin, Japanese parallel translation